■研究発表論文

巡礼体験との関係からみた文化遺産「熊野参詣道伊勢路」の推奨される観光に関する研究

A Study of Recommended Tourism Related to Pilgrimage Experience of Cultural Heritage Kumano Pilgrimage Route Iseji

伊藤　文彦*　　伊藤　弘**　　武　正憲**

Fumihiko ITO　Hiromu ITO　Masanori TAKE

Abstract: In recent days it is much more often to utilise the heritage as an important resource of the tourism. Kumano pilgrimage route Iseji has been recognized as a heritage of pilgrimage space and has been managed as a world heritage site, but the tourism has not been analysed from the value of the heritage. This study aims to clarify the way of realising the value of heritage on the tourism context through the case study of the Kumano pilgrimage route Iseji.　As a result of the analysis about the guidebooks of Iseji, many guides recommend treating Iseji as an object to see with the information of "Sacred Places" in a small place, while some guidebooks recommend walking from Ise to Kumano like a pilgrim without the information of the faith. The way of tourism on a cultural site, with the consideration of the original way of use of the heritage, should be designed to compensate some part of the factor (information, space, object and behaviour) which tend not to be written on the guidebooks.

Keywords: *Cultural Heritage, World Heritage, Pilgrimage Route, Tourism, Guidebook*
キーワード：文化遺産，世界遺産，巡礼路，観光，ガイドブック

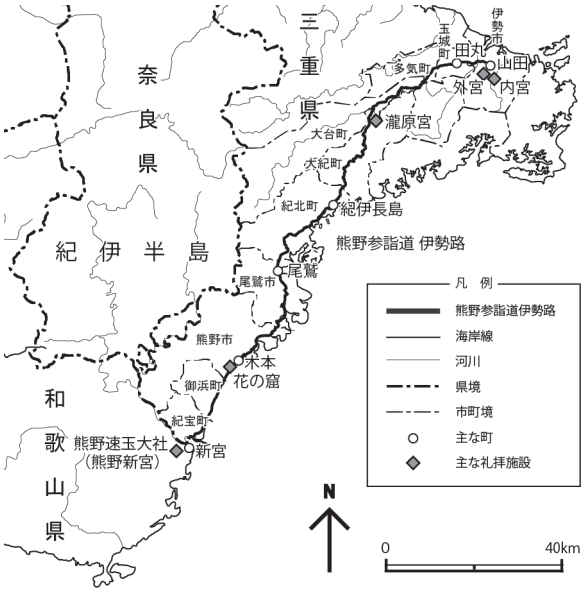
1．背景と目的

近年文化庁は，日本遺産事業をはじめ地域振興や観光振興を目的に文化遺産を利用する施策を進めており[1]，2018 年には「文化財の活用を促すため規制を緩める」[2]文化財保護法の改正を実施した。また，文化遺産の観光利用に関する論考も多く見られ，文化遺産を観光ビジネスの商材ととらえ文化の保護よりも観光客目線での「楽しみ方」の創出を主張するもの[3]，博物館について観光の方向付けを与えようとするもの[4]，重要伝統的建造物群の民家の利用を推奨するもの[5]，史跡・名勝・埋蔵文化財について観光資源化を図る論考[6)7)8)9)10]等がある。一方，集客目的の開発行為やイベントは文化遺産の活用ではないとする主張[11]も見られる。

2004 年に『紀伊山地の霊場と参詣道』の構成資産の一つとして，一部が世界遺産に登録された熊野参詣道伊勢路（以下，伊勢路）（図－1）は，伊勢から熊野まで巡礼者の意識に働きかける装置性を有する巡礼路としての価値が見出され[12]，管理運営が必要とされるとともに[13]，実際に観光者によって利用されている文化遺産である。伊勢路の観光入込客数は世界遺産登録以降 3 倍から 4 倍に急激に増加している。また，2010 年から 2012 年頃にかけて世界遺産登録区間を走るトレイルランニング大会が観光庁等によって行われた[14)15]。一方で，スポーツ登山のような利用は好ましくないとする見解も示されており[16]，如何なる利用の在り方が，観光者による文化遺産の価値（文化遺産となる物に本来見出されていた価値）の享受につながるのかを検討する必要がある。

伊勢路を含む紀伊山地における観光については，戦前から戦後，さらに世界遺産登録前後にかけて熊野の表象が変化していったことが指摘されており[17)18)19]，熊野を紹介する内容が歴史や伝統の保護・伝達からかけ離れているとする指摘[20]も見られる。しかし，これらはいずれも文化遺産に対する観光のあり方に対する検討と批判にとどまっている。そこで本稿においては，伊勢路を事例に，紀伊山地における文化遺産の観光利用について，ガイドブックが提示する観光の観点からの捉え方と，推奨される観光体験（空間，対象物，行動）の変遷から把握し，巡礼者の意識に働きかける巡礼路の装置性[21]により近世以前の人々が享受していた体験と比較することで，観光者による文化遺産の価値の享受につながる観光の在り方を考察することを目的とする。

観光者は，事前にガイドブック等で情報を収集し，それを基に観光を行うと考えられる。現在ウェブサイトもあるが，ガイドブックは，観光動向を踏まえて早くとも 1 年ごとに内容が更新され，情報の更新が早いウェブサイトに比べて観光者への観光利用の定着がされやすく，また編集者が現地情報を基に責任をもって発信することから信頼性が高いと考えられることから，観光利用を俯瞰する情報として適切と考え，調査対象とした。



図－1　熊野参詣道伊勢路位置図

*筑波大学人間総合科学研究科/三重県教育委員会　**筑波大学芸術系

2．研究方法

これまでに刊行・配布された伊勢路をとりあげたガイドブックの文献調査を行う。研究対象とするガイドブックは先行研究[22]を参考として，

ア　一般的な観光地を紹介・記載しているもの

イ　実際に旅行者が利用することを想定しているもの

ウ　伊勢路（熊野古道伊勢路）が含まれているもの

を条件とし，伊勢路の所在地である三重県の中央図書館（三重県立図書館）に収蔵されている書籍で閲覧可能なもの及び現在入手可能な全ての書籍60冊のガイドブックを対象とした（表－1）。

次に，これらのガイドブックを対象に，先行研究で明らかになっている，前述した伊勢路の装置性を参考に，観光の観点からの捉え方と，推奨される観光行動（1 空間，2 礼拝施設・見所，3 体験）との関係を把握した。

まず，ガイドブックが提示する伊勢路の観光の観点からの捉え方については，表紙に記載されている書名やキャッチコピー等の文字情報から把握した。表紙は，読者が購入時に最初に目にするページであり，読者に対して書籍が最も重視している内容を端的に伝える役割を担うため，各ガイドブックの観光の観点からの捉え方を把握するのに適していると考えられる[23]。そこで，伊勢路にかかるガイドブックのうち，伊勢路の情報を中心的な主題に取り上げる専門的なガイドブックについては表紙に掲載されている文字情報の全てを抽出し，南紀から伊勢にかけての地域全体を紹介しそのコンテンツの一つとして伊勢路を取り上げる地域的なガイドブックについては，「熊野古道」にかかる文を抽出した。これら抽出された文をフリーソフトのテキストマイニングソフトであるKH Coder を用いてクラスター分析によって分類した[24][25]。クラスター分析の対象はすべての品詞とし，強制抽出する語として，本分析においてきわめて重要な「世界遺産」「紀伊山地の霊場と参詣道」「熊野参詣道」「熊野古道」「伊勢路」に加え，ソフトが複数の品詞で別々に集計することのある「熊野速玉大社」「熊野那智大社」「熊野本宮大社」「熊野三山」「高野山」「大辺路」「小辺路」「中辺路」「大門坂」を指定した。さらに，表紙に熊野古道にかかる文字情報のないものについては，「記述無し」の語をあてた。さらに，クラスター分析には Ward 法を用い，距離は Jaccard 法によって測定した。分析対象数が60であることから1クラスター当たり10前後の要素が該当することを想定し，クラスター数は5を指定した。さらに，各クラスターで得られた抽出語から Jaccard 係

表－1　分析対象のガイドブック一覧

番号	発行者	書名	発行年	発行主体	書籍形態	ガイドブックの性格
1～17	JTB/ JTB パブリッシング	るるぶ南紀伊勢志摩	2001～2017	大手出版社	マガジン	地域的ガイドブック
18～23	昭文社	マップルマガジン　南紀伊勢	2001～2006	大手出版社	マガジン	地域的ガイドブック
24～27	昭文社	マップルマガジン　南紀伊勢・志摩	2007～2010	大手出版社	マガジン	地域的ガイドブック
28～33	昭文社	マップルマガジン　まっぷる南紀伊勢・志摩	2011～2014, 2016, 2017	大手出版社	マガジン	地域的ガイドブック
34	昭文社	マップルマガジン　まっぷる南紀伊勢・志摩　高野山	2015	大手出版社	マガジン	地域的ガイドブック
35	昭文社	上撰の旅19　南紀・伊勢	2003	大手出版社	書籍	地域的ガイドブック
36	JTB	熊野古道を歩く	1999	大手出版社	書籍	専門的ガイドブック
37	JTB	紀伊熊野古道をあるく	2004	大手出版社	書籍	専門的ガイドブック
38	JTB パブリッシング	熊野古道をあるく	2015	大手出版社	書籍	専門的ガイドブック
39	東紀州地域活性化事業推進協議会	くろしお文庫　熊野古道―甦る神々の道	1997	行政関係機関	書籍	専門的ガイドブック
40	東紀州地域活性化事業推進協議会	熊野古道伊勢路名所図絵 お伊勢さんから熊野三山へ	2001	行政関係機関	リーフレット	専門的ガイドブック
41	東紀州地域活性化事業推進協議会	くろしお文庫　熊野古道を歩く　第3刷	2002	行政関係機関	書籍	専門的ガイドブック
42	東紀州地域活性化事業推進協議会	熊野古道伊勢路 甦る神々のみち	2001～2004の間※	行政関係機関	リーフレット	専門的ガイドブック
43	三重県 地域振興部 東紀州活性化・地域特定プロジェクト	日本の原郷吉野熊野を歩く ルートマップ&アクセスガイド	2004～2005の間※	行政関係機関	リーフレット	専門的ガイドブック
44	東紀州地域活性化事業推進協議会	世界遺産熊野古道伊勢路ガイド ROUTE GUIDE	2004～2006の間※	行政関係機関	リーフレット	専門的ガイドブック
45	伊勢路イラストマップ探検隊（三重県東紀州対策室）	伊勢から熊野への歩き旅　熊野古道伊勢路図絵　平成の熊野詣　世界遺産登録5周年記念冊子	2009	行政関係機関	リーフレット	専門的ガイドブック
46	三重県立熊野古道センター 東紀州観光まちづくり公社	世界遺産紀伊山地の霊場と参詣道　熊野古道伊勢路	2010	行政関係機関	リーフレット	専門的ガイドブック
47	東紀州観光まちづくり公社	世界遺産熊野古道を歩く　伊勢から熊野三山へ～熊野古道伊勢路の旅～　第7刷	2011	行政関係機関	書籍	専門的ガイドブック
48	伊勢路イラストマップ探検隊（三重県東紀州振興課）	伊勢から熊野への歩き旅　熊野古道伊勢路図絵　新・平成の熊野詣　世界遺産登録10周年記念冊子	2014	行政関係機関	リーフレット	専門的ガイドブック
49	伊勢文化舎	聖地巡礼　熊野・吉野・高野山と参詣道　熊野古道，大峯・吉野の道，高野山町石道　巡礼の道50コースを歩くガイド	2004	その他	書籍	専門的ガイドブック
50	デージーエス・コンピュータ	熊野古道 Ⅱ伊勢路大台ケ原	2004	その他	リーフレット	専門的ガイドブック
51	川端 守　風媒社	熊野古道世界遺産を歩く ガイド	2004	その他	書籍	専門的ガイドブック
52	世界文化社　森田敏隆	ほたるの本　世界遺産　紀伊山地　熊野古道を行く	2005	その他	書籍	専門的ガイドブック
53	宇江敏勝監修　山と渓谷社	熊野古道を歩く	2006	その他	書籍	専門的ガイドブック
54	山と渓谷社	エコ旅ニッポン④熊野古道を歩く旅	2010	その他	書籍	専門的ガイドブック
55	伊勢・熊野巡礼部メイツ出版社	とっておきの聖地巡礼世界遺産「熊野古道」歩いて楽しむ南紀の旅	2013	その他	書籍	専門的ガイドブック
56	伊藤文彦	熊野古道伊勢路を歩く―熊野参詣道伊勢路巡礼―	2015	その他	書籍	専門的ガイドブック
57	山と渓谷社	歩いて旅する　熊野古道・高野・吉野　世界遺産の参詣道を楽しむ	2015	その他	書籍	専門的ガイドブック
58	川端 守　風媒社	熊野古道巡礼の道伊勢路を歩く	2015	その他	書籍	専門的ガイドブック
59	春野草結 山と渓谷社	ちゃんと歩ける熊野古道中辺路・伊勢路	2017	その他	書籍	専門的ガイドブック
60	伊勢・熊野巡礼部メイツ出版社	とっておきの聖地巡礼世界遺産「熊野古道」歩いて楽しむ南紀の旅　改訂版	2018	その他	書籍	専門的ガイドブック

※　発行年の明示がないもので，発行主体の存続期間と「世界遺産登録」等掲載情報から発行年代を特定した。

数を用いてクラスターにおける特徴語を抽出し，それによってクラスターの意味づけを行った。

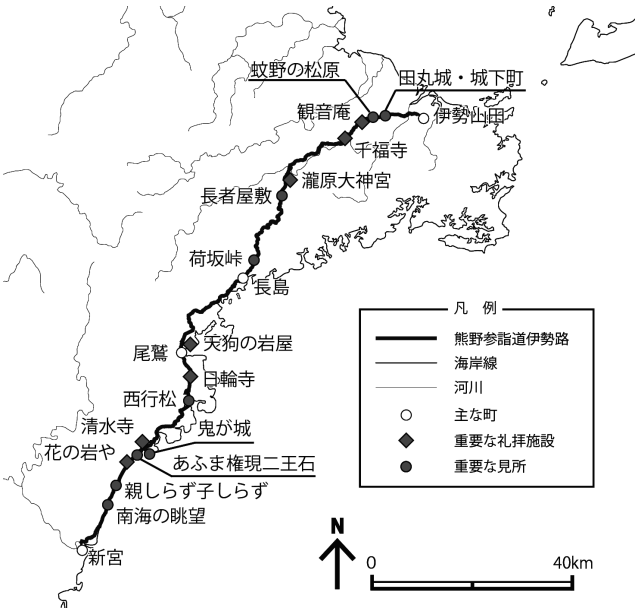
空間については，ガイドブック本文中で伊勢路を紹介する部分の伊勢から熊野への方向性の意識と起終点を把握した。まず，方向性の意識については，伊勢から熊野への方向に従い，途中で引き返さないものは方向性を意識していると把握した。そのうえで伊勢から熊野への全行程を紹介し，かつ方向性を意識しているものを［全体］，全行程は紹介していないが，方向性を意識しているものがある場合を［一部］，全行程は紹介せずかつ，方向性を意識しているものがない場合を［点］，そもそも空間を紹介していないものを［なし］とした。

礼拝施設と見所については，先行研究で巡礼旅を確認するうえで重要な礼拝施設として指摘されている観音庵（石仏庵），無量山千福寺（柳原観音），瀧原大神宮（瀧原宮），天狗の岩屋（岩屋堂），日輪寺（八鬼山荒神堂），比音山清水寺（泊観音），花の岩や（花の窟神社）の７個所の礼拝施設と，日常から非日常への旅を演出していた重要な見所として指摘されている，田丸城・城下町，蚊野の松原，長者屋敷，荷坂峠，西行松，鬼が城，あふま権現二王石（獅子巌），親しらず子しらず，南海の眺望の９個所（図―２）を対象にガイドブックの本文中で紹介されている数を把握した。また見所については，日常から境界までに相当する田丸城・城下町から荷坂峠の４個所と，非日常に相当する西行松から南海の眺望の５個所に分けて把握した。ただしガイドブック中で言及があっても，伊勢路と関連付けて記述されていない場合には数には計上しなかった[26]。

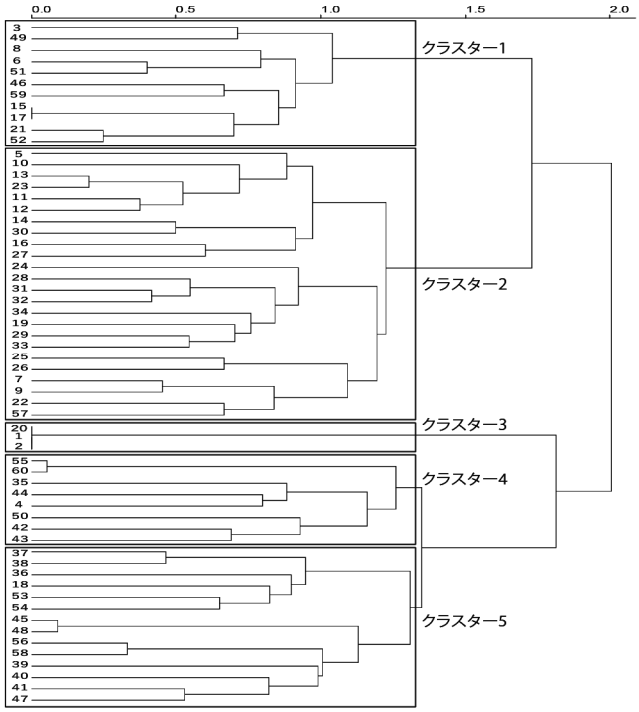
ガイドブックが推奨する体験については，先行研究において伊勢路の装置性は伊勢から熊野への徒歩による移動によって機能していたことが指摘されていることから，移動方法を取り上げて検討する。本文中の記述から，まず歩行のみか，ドライブ等の体験を含むかを把握した。歩行については，巡礼路沿道の宿泊施設の紹介の有無を把握して宿泊施設と共に紹介されているものを徒歩による資源間の移動を前提とした【徒歩旅行】，宿泊施設の記述がないものを，限定的に歩く活動中心の【歩行】に区別した。また，伊勢路の紹介はあっても行動の記述の無いものを【行動なし】とした。

さらに，ガイドブックによる，観光の観点からみた伊勢路の捉え方が具体の内容に影響を及ぼすだろうと考え，伊勢路の捉え方と空間，礼拝施設・見所，行動の関係をみた。

最後に，ガイドブックが提示する伊勢路の捉え方と，ガイドブックの発行時期および発行主体の関係について整理し，ガイドブックが推奨する文化遺産の観光体験の変遷を把握したうえで，近世以前の人々が享受していた巡礼路での体験と比較して，文化遺産の価値を享受できる方法について考察する。



図―2　重要な礼拝施設・見所位置図



図―3　クラスター分析結果（左端数字は表―1 文献番号に対応）

表―2　ガイドブック表紙のクラスターごとの頻出語

クラスター１ 世界遺産		クラスター２ 聖地・パワースポット		クラスター３ 情報なし		クラスター４ エリア観光		クラスター５ 徒歩旅行	
抽出語	Jaccard 類似性測度	抽出語	Jaccard 類似性測度	抽出語	Jaccard 類似性測度	抽出語	抽出語	抽出語	Jaccard 類似性測度
登録	0.4286	高野山	0.6667	記述	1	ガイド	0.4615	伊勢路	0.6111
世界遺産	0.2821	熊野三山	0.4839			松本	0.375	歩く	0.375
熊野古道	0.2	伊勢神宮	0.4615			掲載	0.375	大辺路	0.3571
祝	0.1818	世界遺産	0.4318			歩ける	0.3333	中辺路	0.3333
紀伊山地の霊場と参詣道	0.1333	熊野古道	0.4038			峠	0.3333	熊野古道	0.2857
巡礼	0.125	聖地	0.3214			エリア	0.3333	小辺路	0.2857
行く	0.125	旅	0.3125			神	0.3	紀伊	0.2667
結	0.0909	パワー	0.2917			情報	0.3	コース	0.2353
紀伊山地	0.0909	スポット	0.25			マップ	0.2727	旅	0.2308
本	0.0909	行く	0.1923			アクセス	0.25	伊勢	0.2222

３．結果

（１）観光の観点からの捉え方と観光行動との関係

１）伊勢路の観光の観点からの捉え方

テキストマイニングの結果をクラスター分析した結果，クラスター１は11冊，クラスター2には24冊，クラスター3には3冊，クラスター4には8冊，クラスター5には14冊が該当した（図－3）。次に各クラスターの特徴的な抽出語からクラスターの意味を解釈すると（表－2），クラスター1では，登録，世界遺産，祝等の語が上位に見られたことから，「世界遺産」を示すと解釈された。クラスター2 は高野山，熊野三山，伊勢神宮という霊場を示す語が上位に見られ，聖地，パワー，スポットという語も見られたことから，「聖地・パワースポット」を示すと解釈された。クラスター3 は記述の１語で，これは「記述無し」として分析をおこなった熊野古道にかかる文字情報の無いガイドブックであり，「情報なし」と解釈された。クラスター4では，ガイド，エリア，情報，マップなどの語が上位に見られたことから，「エリア観光」を示すと解釈された。クラスター5では，伊勢路，中辺路，大辺路，小辺路等の「道」と，歩く，コース，旅が上位に見られたことから，「徒歩旅行」を示すと解釈された。ガイドブックが示す情報は以上の「世界遺産」11冊，「聖地・パワースポット」24 冊，「情報なし」3 冊，「エリア観光」8冊，「徒歩旅行」14冊に分類された。

２）空間，礼拝施設と見所，行動

空間については，［全体］9冊，［一部］37冊，［点］13冊，［なし］1 冊であり，［一部］を紹介するものが多かったが，空間である道はほとんどのガイドブックで紹介されていた。

礼拝施設と見所については，紹介されている個所数の最大は 16個所中15個所，最少は2個所だった。また，礼拝施設と非日常の見所については，いずれのガイドブックでも最低 1 個所以上紹介されていたが，日常の見所が紹介されているガイドブックは半数以下の24冊しかなかった。ガイドブックが推奨する観光行動については，まず【徒歩旅行】に分類される基準となる宿泊施設の提示方法として，巻末にまとめて宿泊施設の連絡先や料金を掲載するもの（『エコ旅ニッポン④熊野古道を歩く旅』等）や，地図中にも宿泊施設の位置を明示するもの（『歩いて旅する　熊野古道・高野・吉野　世界遺産の参詣道を楽しむ』等）があった。また，【歩行】は，「本コース終点 JR 栃原駅（紀勢本線）へはもうすぐだ。」（『世界遺産熊野古道を歩く伊勢から熊野三山へ～熊野古道伊勢路の旅～第7刷』），「車を置いて古道ウォーク。」（『マップルマガジンまっぷる南紀伊勢・志摩 11-12』）のように，起終点に鉄道駅や自動車をあてている表現がみられた。以上の結果，【徒歩旅行】7冊，【歩行】42 冊，【車移動含む】8 冊【行動なし】3 冊となり，車移動を前提としているものがあることが伺われた。

３）伊勢路の観光の観点からの捉え方との関係

まず，空間（図－4）について検討すると，「徒歩旅行」の捉え方を示すガイドブックは，約半数が伊勢から熊野までの空間全体を紹介し，残りは［一部］の空間を紹介していた。一方，「エリア観光」と「聖地・パワースポット」を示すガイドブックでは，［全体］を紹介するものは僅少で，約3割が［点］として紹介していた。

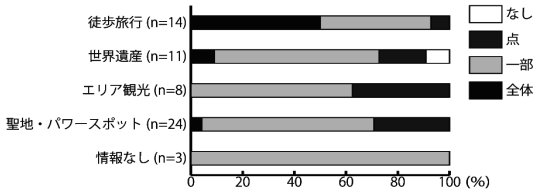
次に礼拝施設・見所について伊勢路の捉え方によるタイプ別に平均個所数をみると（図－5），「徒歩旅行」の捉え方を示すガイドブックでは，紹介される礼拝施設・見所個所数が多い傾向がみられた。また，礼拝施設，非日常の見所だけでなく，日常の見所も紹介する傾向が認められた。「世界遺産」，「エリア観光」と捉えているものにおいては，紹介される個所数が「徒歩旅行」に比べて減少する一方で，日常の見所も一定個所紹介されていた。また，非日常の見所が礼拝施設よりも多く紹介されていた。一方，「聖地・パワースポット」と「情報なし」のガイドブックでは，紹介される個所数が 5 以下であり，非日常の見所が紹介される割合はさらに高まり，日常の見所がほとんど紹介されない傾向がみられた。

さらに観光行動の記述を見ると（図－6），「徒歩旅行」を示すガイドブックは14冊中5冊が実際の行動としても【徒歩旅行】を推奨し，8 冊が【歩行】を推奨していた。しかし，「エリア観光」では，【歩行】が推奨され，「世界遺産」，「聖地・パワースポット」では，【車移動含む】観光行動も推奨されていた。

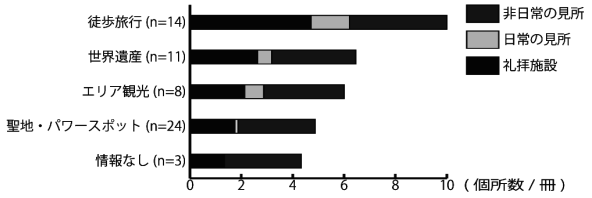
（２）発行時期別のガイドブックの特徴

ガイドブックの記述内容は，その発行年次によっても変化すると考えられる。そこで，伊勢路が世界遺産に登録された2004年を基準に，2003年まで，2004～2008年，2009～2013年，2014～2018年の5年ごとに区分した（図－7）。

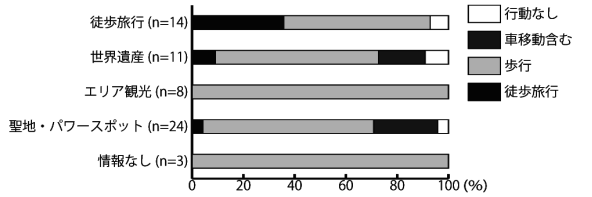
まず，世界遺産登録前の2003年までにおいては，「徒歩旅行」として捉えたガイドブックが最も多かった。一方，「世界遺産」「エリア観光」「聖地・パワースポット」と捉えたガイドブックは限定的で，「情報なし」はすべてこの時期に発行されたものだった。ガイドブック執筆者が伊勢路を観光の観点からどのように捉えるべきかを検討していた時期にあたると考えられる。次いで，世界遺産



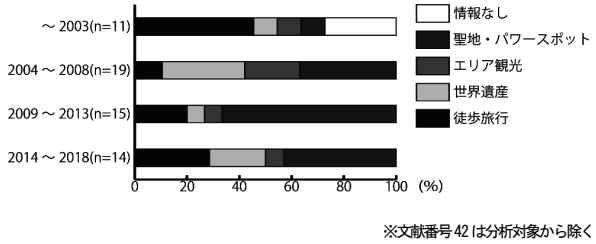
図－4　空間の記述冊数割合



図－5　物（礼拝施設・見所）平均記述個所数

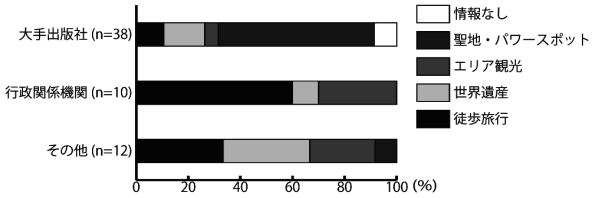


図－6　推奨観光行動記述冊数割合



※文献番号 42 は分析対象から除く

図－7　発行時期別ガイドブックの観光の観点からの捉え方



図－8　発行主体別ガイドブックの観光の観点からの捉え方

に登録された2004年からの5年間は，ガイドブックの発行冊数が増加する一方で，「徒歩旅行」を主題にしたガイドブックの割合は大きく減り，「世界遺産」，「エリア観光」，「聖地・パワースポット」のガイドブックが増えている。世界遺産登録5周年にあたる2009 年以降 5 年間は，全体の発行冊数がやや減少する中で，「聖地・パワースポット」の割合は大きく増加している。一方で「世界遺産」と「エリア観光」はこの時期大きく減少している。さらに世界遺産登録10周年を迎える2014年からの5年間では，「徒歩旅行」の冊数が伸び，逆に「聖地・パワースポット」は減少の傾向を見せている。なお，「世界遺産」の割合が若干増加しているのは2016 年に紀伊山地の霊場と参詣道は「軽微な境界の変更」，いわゆる追加登録が主に和歌山県において行われた影響と考えられる。

このように，世界遺産登録直後には，「世界遺産」や「エリア観光」も含めた様々な捉え方がされていた伊勢路は，世界遺産登録5周年以降は，「徒歩旅行」と「聖地・パワースポット」に集約されていったと考えられる。

（3）発行主体別のガイドブックの特徴

ガイドブックの記述内容は，発行主体が対象とみなす読者層や発行部数などにより，発行主体ごとに異なるものと考えられる。そこで，発行主体を大手出版社，行政関係機関，その他（小規模な出版社や著者名が明記されるもの）に分類し分析する（図―8）。

1）大手出版社発行のガイドブック

まず，伊勢路の世界遺産登録前から刊行され，毎年版を重ねているマガジンタイプのガイドブックである『るるぶ』を刊行するJTB／JTBパブリッシング発行のガイドブックと，『マップル』を刊行する昭文社発行のガイドブックについて検討する。分析は，『るるぶ』シリーズと『マップル』シリーズに加え，伊勢路の情報を記載する単行本のガイドブックも対象としている。ガイドブックの総発行冊数は最も多く38冊を数え，その中で「聖地・パワースポット」の捉え方を示すものが23冊を占める。

大手出版社が発行するマガジンタイプのガイドブックは，紹介されるモデルプランから 2〜3 日間の旅行を想定していると考えられる。このことから，時間のかかる伊勢から熊野までの【徒歩旅行】は紹介の対象とならず，行動も【車移動含む】が推奨されたものと考えられる。

ただし，これら出版社も，より広範な読者を得ようとするマガジンタイプのガイドブックではなく，より特定の読者層を想定した専門的なガイドブックにおいては，「徒歩旅行」を情報として示し，【歩行】する行動を推奨している。大手出版社はこのようにガイドブックを差別化することで，より広範な読者と，「徒歩旅行」に関心を持つ特定の読者層の両方に対する旅行案内を行おうとしていたと考えられる。

2）行政関係機関発行のガイドブック

行政関係機関が発行しているガイドブックは10冊であった。伊勢路の所在地である三重県や，三重県と関係市町村で作る東紀州地域活性化事業推進協議会が，世界遺産登録前の1997年から2014年にかけて，ガイドブックやパンフレットを発行している。

伊勢路の捉え方別に把握すると，「徒歩旅行」が6件，「世界遺産」が1件，「エリア観光」が3件で，「聖地・パワースポット」「情報なし」はなく，「徒歩旅行」が中心であると理解される。

3）その他発行のガイドブック

伊勢路を取り上げるガイドブックは世界遺産登録後，断続的に発行されており，12件であった。このうち，「徒歩旅行」と「エリア観光」が4件と最も多く，ついで「世界遺産」の3件，「聖地・パワースポット」は1件で，「聖地・パワースポット」「情報なし」の少ない傾向は，行政関係機関発行のものと類似していた。

4．まとめ

まず，ガイドブックによる観光の観点からみた伊勢路の捉え方をもとに，空間，礼拝施設・見所，行動の把握を行った。その結果，伊勢路の捉え方と，そのガイドブックで示される空間，礼拝施設・見所，行動には一定の傾向がよみとれた（表―3）。

「徒歩旅行」の場として捉えているものについては，伊勢から熊野まで［全体］の空間を利用し，礼拝施設・見所については多くの個所を取り上げたうえで礼拝施設をやや多く紹介し，行動は【徒歩旅行】または【歩行】を推奨していた。「世界遺産」と捉えているものでは，［一部］の空間を利用し，非日常の見所がやや多く，【歩行】【車移動を含む】を推奨していた。「エリア観光」においては，［一部］又は［点］の空間を利用し，非日常の見所がやや多く，【歩行】を推奨していた。「聖地・パワースポット」においては，［一部］又は［点］の空間を利用し，礼拝施設・見所の紹介個所は少なく，日常の見所の紹介がない一方で非日常の見所が多く，【歩行】【車移動を含む】を推奨していた。「情報なし」では［一部］の空間を利用し，礼拝施設・見所の紹介個所数は少なく，日常の見所の紹介がない一方で非日常の見所が多く，【歩行】を推奨していた。

以上の伊勢路の捉え方と空間，礼拝施設・見所，行動の関係性の傾向を踏まえ，ガイドブックの発行時期と発行主体に注目して整理し，伊勢路の推奨される観光の変遷をみた。

その結果，世界遺産登録以前，行政関係機関を中心に，伊勢路の観光は「徒歩旅行」として捉えられていた。一方，大手出版社は「情報なし」を出版しており，伊勢路の捉え方を検討していた時期と考えられる。世界遺産登録直後，「徒歩旅行」の捉え方は後退し，かわって「世界遺産」，「エリア観光」，「聖地・パワースポット」が台頭した。伊勢路を「世界遺産」「エリア観光」として捉えるも

表―3　ガイドブックの傾向と巡礼路の認識

観光の観点からの捉え方	主に推奨される空間	主に推奨される礼拝施設・見所	主に推奨される行動	主な発行主体	主な発行時期				巡礼路の認識
					世界遺産登録前	世界遺産登録直後	世界遺産登録5周年以降	世界遺産登録10周年以降	
徒歩旅行	全体	個所数多い 日常の見所あり 礼拝施設やや多い	徒歩旅行／歩行	全ての発行主体	○	×	△	○	○
情報なし	一部	個所数少ない 日常の見所なし 非日常の見所多い	歩行	大手出版社	○	×	×	×	△
世界遺産	一部／点	日常の見所あり 非日常の見所やや多い	歩行／車移動	大手出版社/その他	×	○	×	△	△
エリア観光	一部／点	日常の見所あり 非日常の見所やや多い	歩行	行政関係機関/その他	×	○	×	×	△
聖地・パワースポット	一部／点	個所数少ない 日常の見所なし 非日常の見所多い	歩行／車移動	大手出版社	×	○	○	○	×

○は該当する，△はやや該当する，×は該当しないことを示す

のは，登録直後の５年間に特有のもので，伊勢路の世界遺産登録によってこの地域が注目を集めたためと考えられた。

世界遺産登録５周年を過ぎると「聖地・パワースポット」の捉え方が優勢となった。これは世界遺産登録の際に価値として認められた「信仰の山の文化的景観」の情報を誇張した捉え方と考えられる。空間の利用方法は［一部］もしくは［点］で，観光行動も【車移動を含む】も推奨しており，伊勢路を歩く空間ではなく，見る対象，いわば「物」として捉えたと考えられる。「聖地・パワースポット」の捉え方のほとんどは大手出版社から発行されたもので，これは広範な人々が受け入れやすい，短期間でより多数の観光地をめぐることを意図したものであったと考えられる。

世界遺産登録10周年を過ぎると，再び「徒歩旅行」が伸長してくる。一方，大手出版社による「聖地・パワースポット」の捉え方も継続しており，伊勢から熊野までの伊勢路全体を歩行空間として捉え，そこに配置された礼拝施設や見所を体験しながら行う徒歩旅行と，伊勢路を物としてとらえ，伊勢路そのものを見る対象として利用する「聖地・パワースポット」の２種類が併存していると考えられる。

改めて近世の伊勢路の利用方法をみれば，伊勢路は伊勢・熊野・西国観音信仰に基づく巡礼空間として捉えられており，そこに配置された礼拝施設や見所を体験しながら行う徒歩旅行がおこなわれていた。今日の観光体験においては，信仰や巡礼という情報は必ずしも強調されていない。しかし，今日の「徒歩旅行」を示すガイドブックに従えば，観光者は空間や礼拝施設・見所，観光行動は近世の伊勢路の利用の方法に近く，伊勢路を巡礼路たらしめる装置性を体験することは比較的容易であると考えられる。一方，「聖地・パワースポット」としての捉え方のガイドブックに従えば，観光者は伊勢路を見る対象として捉え，歩行空間としては認識しがたいと思われる。そのため，伊勢路を近世の巡礼空間として認識することは比較的困難で，巡礼者が体験していた装置性による意識や感情の変化も体験しがたいと考えられる。

観光者に対して出版社や行政が文化遺産の観光利用を推奨する際には，文化遺産が本来有していた人の利用における役割を，今日においても体験できるような内容にすることが望ましく，それにより文化遺産の価値は観光者に認識されるものと考えられる。しかし，様々な制約によりそれが困難な場合には，観光体験として推奨し難い要素（情報，空間，対象物，行動）を明確化し，それぞれの要素が少しでも体験されるよう，工夫をする必要があると考えられる。

謝辞：本研究はJSPS科研費 16K08125の助成を受けたものです。

補注及び引用文献

1）文化庁は平成27(2015)年度から地域活性化を目的として日本遺産(Japan Heritage)事業を展開するとともに，平成28（2016）年４月26日には文化財を「観光資源」であると定義し，「文化財をコストセンターからプロフィットセンターへ転換させる」とする「文化財活用・理解促進戦略プログラム」を公表している。

2）たとえば，「文化財の活用を促すため規制を緩める文化財保護法と地方教育行政法の改正法が１日,参院本会議で共産以外の賛成多数で可決,成立した。保存が重視されてきた文化財を,観光や地域振興のために活用しやすくするもの。(中略) 今回の改正は,「観光立国」を目指す政権の方針に沿ったもの。」のように,文化財を活用しやすくするための法改正という趣旨の報道が散見された。：朝日新聞：2018年６月２日記事

3）デービッド アトキンソン(2015)：「文化財」こそが観光ビジネスの切り札だ（特集 地方に活路あり）：新潮45　34(7)，120-124

4）三輪嘉六(2007)：文化財と博物館と観光と（特集 地元力―地域を支えるその実力と可能性）：観光文化31(1)（通号181)，14-17

5）田中禎彦(2015)：山梨県の集落町並みの保存と観光・まちづくり：月刊文化財623号

6）和泉大樹(2016)：埋蔵文化財（遺跡）活用の目的と実施事業―その研究視点について―：阪南論集．人文自然科学編52(1)，75-86

7）和泉大樹（2016)：「観光」というコンテクストにおける「記録保存」の措置を取られた「埋蔵文化財（遺跡)」に関するアプローチ ―「記録保存」から「記憶保存」へ―：阪南論集．人文・自然科学編51(2)，93-103

8）和泉大樹(2016)：観光資源としての「名勝」－『保存管理計画』にみる活用方案からのアプローチ－：阪南論集　社会科学編51(3)，137-146

9）和泉大樹(2017)：文化財活用への一考察：南アルプス市の取組から考える地域資源としての文化財・観光資源としての文化財：阪南論集人文・自然科学編53(1)，21-33

10）和泉大樹(2017)：史跡の活用と博物館―史跡・遺跡の観光資源化への序論―：阪南論集・人文自然科学編52(2)，45-54

11）小濵 学(2015)：講演録 文化財≠観光資源：本当の歴史、文化財活用ってなんだろう(世界遺産,海女等を例に)：『ふびと』三重大学歴史研究会編（66)，62-81

12）伊藤文彦,伊藤 弘,武正憲(2017)：熊野参詣道伊勢路における巡礼空間の装置性：ランドスケープ研究 80(5)，589-592

13）伊藤文彦,伊藤弘,武正憲(2018)：文化遺産「熊野参詣道伊勢路」の管理運営計画策定における地域住民の関わり方：ランドスケープ研究81(5)，613-618

14）三重県立熊野古道センター：１１月２７日（土）～１１月２８日（日）トレイルランニング・アカデミー番外編 in 熊野古道伊勢路：熊野古道センターホームページ 2010.11.22日更新，　2018.9.18閲覧
http://www.kumanokodocenter.com/system/index.php?itemid=328

15）JTB：鏑木毅選手と行く！熊野古道伊勢路・トレイルランニングの旅：JTBスポーツホームページ　2018.9.18閲覧
http://sports.jtb.co.jp/triwwwp/tours/view/178/bwt2012-064trailrun

16）西村幸夫(2016)：熊野古道をめぐる議論「顕著で普遍的な価値」と今後の論点：神々が宿る聖地　世界遺産　熊野古道と紀伊山地の霊場：ブックエンド，156-174

17）神田孝治(2010)：熊野の観光地化の過程とその表象：国立歴史民俗博物館研究報告第156集，137-161

18）天田顕徳(2012)：熊野―霊場と観光地のはざまに揺れ動く聖地：聖地巡礼ツーリズム：弘文堂，94-97

19）寺田憲弘(2014)：熊野の観光メディア言説の変動―ガイドブックと旅行雑誌における記述を対象として―：観光研究Vol.26

20）岡本亮輔(2017)：自己実現する熊野参詣者:現代化される文化資源：CATS 叢書 11，73-78

21）前掲12文献

22）今野理文,十代田朗,羽生冬佳(2002)：観光ガイドブックにみる観光地のアピールポイントの変遷：観光研究vol.14，9-16

23）櫻井宏樹,下村彰男,小野良平,横関隆登(2014)：雑誌『國立公園』表紙にみる添景人物と自然風景の描かれ方：ランドスケープ研究

24）開発者は樋口耕一(http://khcoder.net/)で,有馬貴之が『るるぶ富士山』の目次を対象としたテキスト分析で利用している。有馬は旅行ガイドブックにみる富士山観光のイメージについて,目次の文章を対象に,目次に使用された特徴語と類似性測度,共起ネットワーク分析を行っている。本稿においては,表紙はその本の提示する情報を端的に示し,読者に取得意欲を抱かせるページであるととらえ,表紙の文言を分析対象とした。また,分析対象は,有馬の論考においては１冊全体が「富士山」にかかるものであったのに対し,本稿で対象としたのは１冊全体が「伊勢路」にかかるものだけでなく,伊勢路を部分的に含むガイドブックであるため,ガイドブックごとに情報量が増減することから,目次の共起ネットワーク分析は実施していない。

25）有馬貴之2015「旅行ガイドブックにみる富士山観光のイメージ変化―『るるぶ富士山』の目次を対象としたテキスト分析―」『地学雑誌』124(6)，1033-1045

26）例えば,『るるぶ南紀伊勢志摩’12』において花の窟神社は,「世界遺産をたどる海沿いルート　コース４伊勢路をドライブ」において紹介されており,伊勢路に関連付けられていると判断された。しかし,瀧原宮は「神々を宿す癒しの聖地　伊勢神宮　もう一つのパワースポット遥宮へ行こう」において紹介されており,紹介文は「参道の自然にも心癒される　宮川の上流,深い渓谷の山の間にひっそりたたずむ瀧原宮と瀧原竝宮。参道に鬱蒼と繁る杉の巨木,そばを流れる清流の心地よいせせらぎや滝の音に心が洗われる。」と,伊勢路については触れられておらず,伊勢路に関連付けられていないと判断された。